

季節のおまつり

## 高山祭（春の山王祭）

雪国の長い冬籠りから解放され、春の訪れを告げる高山祭は、四月十四日と十五日に旧高山

城下の南半分の区域で、屋台十二台が登場し繰り広げられる。絢爛豪華な屋台は動く陽明門とも讀えられ、桜満開の古都を巡行し、夜には屋台の提灯に灯が入り誠に幻想的である。日本人は何事につけ三大という括りが好きだが、高山祭は京都の祇園祭、秩父の夜祭と並んで、日本三大美祭の一つに数えられている。

高山祭は、春に行われる日枝神社の山王祭と、十月九日、十日に旧城下町の北半分で祝われる櫻山八幡宮の八幡祭という、春秋の二つの祭を総称したものである。

高山祭の起源は江戸時代で、八代将軍吉宗の統治する享保三年（一七一八年）に、屋台が

使用された記録がある。それ以前は神楽を演奏して神輿を担ぐ形態のものだった。その名残かどうか分からぬが、春秋の祭で

は、神樂台が屋台囃子を奏で行列を先導するこになつてゐる。直径一メートル余りの平釣太鼓が両面から二人の奏者によつて打たれるさまは壯觀である。弊社では十数年ほど前、秋の神樂台の平釣太鼓を復元製作させていただいた。

屋台はその後改修されたり新調されたりするたびに飛驒の匠によつて優れた彫刻や精巧なカラクリ人形が加えられ、それらの演技が見られる屋台は、春祭では龍神台と三番叟台と石橋台、秋は布袋台で、日本一見事なカラクリと言えるだろう。

屋台を飾る幕や織物、飾り金具、カラクリ人形などは京都で作られた。また、屋台 자체の組形は江戸から伝わったと言われ、屋根が伸縮する機構は江戸城の城門をくぐる時に使われた山車が変形したものと推定されている。文化文政年間になると、高山独自の形を作りだし、彫刻や懸装品が付けられて豪壮で優美な屋台に変わつていった。

「匠」は熟練した木工という意味で、「はこ」は道具箱、そして中には斤という字が収められていい。古くから飛驒の国は大和朝廷へ税の代わりに匠を送り出してきた。江戸時代後期にこれらの技術が最高潮に達し、花開いたのが、高山祭の屋台であると言える。



（写真・文 宮本卯之助）



この国の佳き伝統とともに  
宮本卯之助

## 三社祭



三社様で親しまれている浅草神社の宮神輿三基は、数ある宮本謹製のお神輿の中でも代表作の一つであり、浅草で商いを営む私共にとては大変な名誉でもあります。戦災により焼失した宮神輿を復興するため、当時の関係者の方々と共に、五代目宮本卯之助が戦前のお神輿の意匠に近いと言われた、日光東照宮のお神輿を見学に伺うなどして誕生したのが、現在の三社型と呼ばれる宮神輿です。大きく四方に張りだした蕨は江戸の粹を感じさせ、華美にならず、堅牢な造りが特徴です。昭和二十五年に御本社神輿（一之宮、二ノ宮）を、その後三ノ宮を謹製。春、浅草つ子には三社祭の足音がもう聞こえてくる頃です。

## 泣き相撲 四月二十六日

## 四国・太鼓台

昭和六十一年に復元された、九代目市川團十郎の「暫」銅像。鎌倉権五郎という子供の像で、この子のように力強く健康に育つて欲しいという願いを込め、法要にあわせ「泣き相撲」が開催されました。

なんとルールは「元気よく泣いた方が勝ち」というシンプルなもの。去年生まれたばかりのかわいい赤ちゃんを学生力士さんが発奮させようとがんばる姿は、端午の節句を前にとても微笑ましい光景です。

### 古典芸能へのとびら

## 蠟燭能

昔ながらの雰囲気を楽しむ「蠟燭能」。ろうそくの灯りが照明だったころ、舞台ではこのわずかな灯りを頼りに能を上演していく、屋外で行われる薪能も「能」を気軽に楽しめる人気でした。どちらも現代の電気照明とはまた違う優しい灯りの中で、能面はいつもと違う表情を見せ、衣装の輝きもいつもとは違う印象を与えます。動きまでもがゆつたりと感じられるのは、ほの暗さによって想像力を掻き立てられるせいでしょうか？これから季節、各地で蠟燭能が上演されます。『きっと昔の人も見た光景なのだろうな』と、数百年前の能に思いを馳せながらぜひご覧ください。



## 湯島天神

湯島天神で梅の咲き誇ります。頃になると、毎年弊社の工場も忙しい季節を迎えます。

日本では一年中どこかでお祭りが行われていると言いますが、下町の人間にとつて春の訪れは、自分たちの祭りが近い知らせに他ならず、自然と心が踊るものであります。

瀬戸内海沿岸では太鼓台、もしくは布団と呼ばれる独自の祭礼文化が継承されてきました。写真は愛媛県新居浜市の太鼓台。お神輿の担ぎ棒にあたる「かき棒」は長さ12mもあり、その下に太鼓が設置されています。四本のかき棒には最大150人ほどの男衆（かき夫）がつき、打ち鳴らされる太鼓の音は腹に響き、かき夫たちのかけ声とともにかきあげ（かつぎ）ます。瀬戸内にも祭りの到来とともに春が訪れます。

いう方が沢山いらっしゃる事と存じます。季節を感じて生きる。それもこの国の佳き伝統ですね。

宮本卯之助商店  
代表取締役社長  
宮本芳彦

発行
株式会社宮本卯之助商店
企画広報室
〒111-10035 東京都台東区西浅草二十一ーー
電話 〇三一三八四四一二二二一 <a href="http://www.miyanoto-unosuke.co.jp">www.miyanoto-unosuke.co.jp</a>